

新疆オイラド・モンゴル社会における 活仏の影響

—シャリワン・ゲゲン14世の円寂に着目して—

ナムジャウ

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

本研究では、新疆のオイラド・モンゴル世界における世俗的活仏であるシャリワン・ゲゲン14世の円寂を受けて、彼の出身地であるホボクサイル・モンゴルの人々の間で行われた哀悼活動と、転生を願う祈禱をめぐる活動などについて、現地調査を通して得たデータを整理し、シャリワン・ゲゲン14世の影響力を検討した。

シャリワン・ゲゲン14世は信者の崇敬を集めるだけでなく、中国政府の要職にも任命されていた。そのため国家上層部から民間まで、自由に動けることで、政府レベルから民間レベルまで多くの情報を持っており、彼の行為、発言などは常に影響力を持っていた。ここ数十年の活躍の中で、シャリワン・ゲゲン14世は次第に単なる宗教リーダーから、新疆におけるオイラド・モンゴルの民族リーダーと移行したのである。

シャリワン・ゲゲン14世の転生を願う祈禱をめぐる活動などは、彼の指導の下で30年間に蓄積されてきた民族主義思想の体现であり、イスラム系民族の民族主義運動と比較すれば、暴動、流血などが見られず、人々の心の中の信念を伴う比較的穏和な民族運動である。

キーワード：オイラド・モンゴル、活仏、シャリワン・ゲゲン

- はじめに
- シャリワン・ゲゲン14世の哀悼活動
 - ゲゲンを迎える行動
 - ゲゲン火葬を巡る、現地の象徴解釈
 - 転生に関する語り
- 転生を願う祈禱をめぐる活動
 - 転生を願う祈禱の契機
 - 転生を願う祈禱をめぐる巡礼
 - 転生を願う祈禱をめぐる戒律
- シャリワン・ゲゲンの影響力について
 - 新疆社会の変容
 - 新疆におけるオイラド・モンゴルの民族主義高揚とシャリワン・ゲゲンの影響力
- おわりに

1. はじめに

中国新疆におけるオイラド・モンゴル社会を中心として影響力を持ち、チベット仏教界世俗的活仏¹⁾であったシャリワン・ゲゲン14世が2014年10月17日の夜²⁾、新疆ウルムチの病院で円寂した。10月17日の夜、ゲゲンの円寂の情報が故郷のホボクサイルへ届くと、多くの人々はウルムチまで行って、ゲゲンの遺体を迎えた。それから4日間、全ホボクサイルの2万人近くのモンゴルは、県城におけるオワート寺 (Ovaat-yin küraa)³⁾の周辺に集会し、哀悼活動を続けた。シャリワン・ゲゲン14世の円寂による哀悼活動はホボクサイルだけに止まらず、新疆全体のモンゴル世界から海外におけるモンゴル世界にまで広がった。そこで人々は、「蒙古麗人」などのモンゴルwebサイトや個人のブログ、Wechat (中国名は微信、中国大手IT企業テンセントが作った無料インスタントメッセージングアプリ)などにゲゲンの写真を載せ、コメントするか、集会するかなどの様々な形で哀悼の気持ちを表した。

ゲゲンあるいは活仏の円寂による転生制度はチベット仏教界にのみ存在する一つの制度である。なお円寂とは高僧ラマの他界を意味する特殊な用語である。活仏といった修行を積んだ高僧ラマが他界すると、その靈魂は他の肉体に移ることができると言われている (矢崎 1969: 77-85)。多くの活仏は人生の最後のとき、自身の円寂する時間を予測し、来世の行く先までがわかるという (周 1995: 60)。これは活仏の特殊な能力である。モンゴルでは本来、「数え決められた命、量り決められた体」という諺にいわれるように、人間の寿命はあらかじめ決められていると考えられてきた。また、一般の人々の靈魂も永遠に生きているものと考えられており、人間は生前に悪いことを多くすれば、来世を失うか、動物として生まれ変わり、良いことを多くすれば、来世に再び人間として生まれることができると信じられていた。その後、モンゴルはチベット仏教を信仰するようになり、転生活仏の思想

をも受け入れた。なお、靈魂が自由に他の肉体に移ることができるのは世俗的活仏だけである。

活仏が円寂すると、来世の行く先は活仏の意志によるものであるから、その後の様々な儀礼や祈祷は来世をめぐって行われる。1930年にダライ・ラマ13世が円寂したときの記録をみると、当時の国民党政府は乾隆年間の6世パンチェン・ラマが北京で円寂したときの儀礼を踏襲して、追悼会を行った。また、当時の蒙蔵委員会を通して各チベット仏教寺院に49日間の諷経をする⁴⁾ことと、パンチェン・ラマが主導して蔵経を、道行高尚之法師が主導して漢経で唸経する⁵⁾こと (中国蔵学 1990: 19-20) を命じ、政府と宗教界が協力して哀悼活動を行った。ダライ・ラマと比較すると、シャリワン・ゲゲンの影響力は強くなく、政府側の対応も明確ではない。ホボクサイルの各仏教寺院で49日間の諷経をする、仏教的な哀悼活動に止まっている。だが、興味深いのは現地における人々の動きである。人々はゲゲンが来世で故郷に帰って来ることを願い、青海の聖地まで巡礼し、自発的に様々な戒律を守って、聖なるゲゲンの靈魂を喜ばそうと努めている。さらにゲゲンの靈魂が故郷に帰還する物語が、ゲゲン生前のある不思議な行為・ある不思議な発言などと関連づけて語られている。それをみると、ゲゲンの靈魂が故郷に帰って来ることは人々の唯一の望みであるともいえる。

本稿の目的は、シャリワン・ゲゲン14世の円寂以後に行われた人々の哀悼活動と、それに続いて行われる転生を願う祈祷をめぐる様々な活動の実態を解明することである。そのためにまず、現地調査によって得られた情報を整理し、その上で、人々がなぜこのような哀悼活動や転生を願う祈祷活動を長く続けているのかを検討する。世俗的活仏の円寂によって起きる人々の様々な反応や活動を分析することは、チベット仏教研究のみに止まらず、仏教を信仰する社会を研究するためにも重要である。というのは、そのような活動に、当該社会が内包する様々な

人間関係や、人々が抱く国家や宗教、そして自分たちの集団に対する意識が端的に表れるからである。本稿はそのような問題を考察するための一つのステップである。

本稿で主に用いる資料は、2015年3月（4日～25日）に中国新疆ウイグル自治区ホボクサイル・モンゴル自治県にて行った現地調査により得たものである⁶⁾。調査の主な方法は聞き取りと参与観察である。なお、調査協力者について本稿では、実名を出さず、仮名を使うこととする。例えば、Namjavの場合は、本稿ではN氏となる。その他、本稿では調査協力者として取り上げるのは、A氏、N氏、H氏、D氏、O氏、H氏、U氏などである。また、本稿では個人情報保護の観点から各協力者の詳細情報を紹介せずに引用している場合もある。

2. シャリワン・ゲゲン 14世の哀悼活動

2.1 ゲゲンを迎える行動

シャリワン・ゲゲン14世が円寂したという情報はホボクサイルの人々にどのように伝えられ、どのような反響を呼んだのだろうか。それについては、ホボクサイル県城に住むA氏の行動が典型的である。彼によると、2014年10月17日の夜、家でベットに入ってちょうど寝ようとしたとき、ある友人から電話があった。普段は相手の声大きいし、非常に明るいものだが、そのときは声が小さくて不思議だったという（以下はA氏が再現したそのときの会話内容である）。

A氏：bainuu（もしもし）！

相手：何している？寝た？

A氏：寝ようとしている、どうした（声が異常だったので）？

相手：（しばらく経って）ゲゲンが円寂されたと聞いた！

A氏：本当ですか？（聞いた瞬間に涙が出て、頭の中が真っ白になった。その後、しばらくのことは覚えてない）

これはA氏のその瞬間の様子であり、多くの人は彼と同様だった。その後A氏が町へ出てみると、町に住む多くのモンゴル人が所々で集まって、泣きながら家族や親戚に知らせている者が多かったという。町に集まった多くの人々がその夜にウルムチまで行ってゲゲンの遺体を迎えた。迎えに行った人々の数は明確ではないが、ウルムチに向かった車は300台以上に上ったという。それを人数にすれば、約1,500人「1台×（4～5）人×300台（以上）」である。それはホボクサイル・モンゴル全人口の1割を占める。10月19日にゲゲンの遺体がホボクサイルへ移ると、特にウルフ（Urqu）⁷⁾からホボクサイルまでの道のりで（図1）、ゲゲンの遺体が着いた所々に手で白いハダグ（Čavan qadr）⁸⁾を持ちながら牛乳を捧げ、祈る人々が多かったという。

ゲゲンの遺体がホボクサイル県城に着くと、県城内のオワート寺が哀悼の中心地となり、哀悼者の数もどんどん増えた。N氏はそのとき県城に行った一人である。N氏はホボクサイル東南部にあるデルーン山脈（Delüün uul）⁹⁾に冬営地を持ち、娘と妻との三人家族である。娘は県城の高校で勉強しており、普段は夫婦二人で家畜の面倒をみている。N氏によれば、10月18日の朝、家近くの坂に登り、携帯を開いてみたとき¹⁰⁾、県城にいる何人かの親戚から電話があったという。

N氏は早速その内の一人に電話すると、ゲゲン円寂の件だったという。N氏は、ゲゲンの円寂を聞いたとき、頭の中が真っ白になって涙が自然に流れてきたという。その後、彼はちょっと気持ちを整理し、家へ戻り、妻に円寂の情報を伝えた。それから二人で相談し、ゲゲンと最後の謁見（遺体に対面）をすることを決めた。しかし、そのとき問題となるのは、妻と二人で県城へ行くと、家畜の面倒をみる人がいなくなるということだった。そこで、彼は近くの家を訪ね、羊群と牛群を交代で放牧することを相談

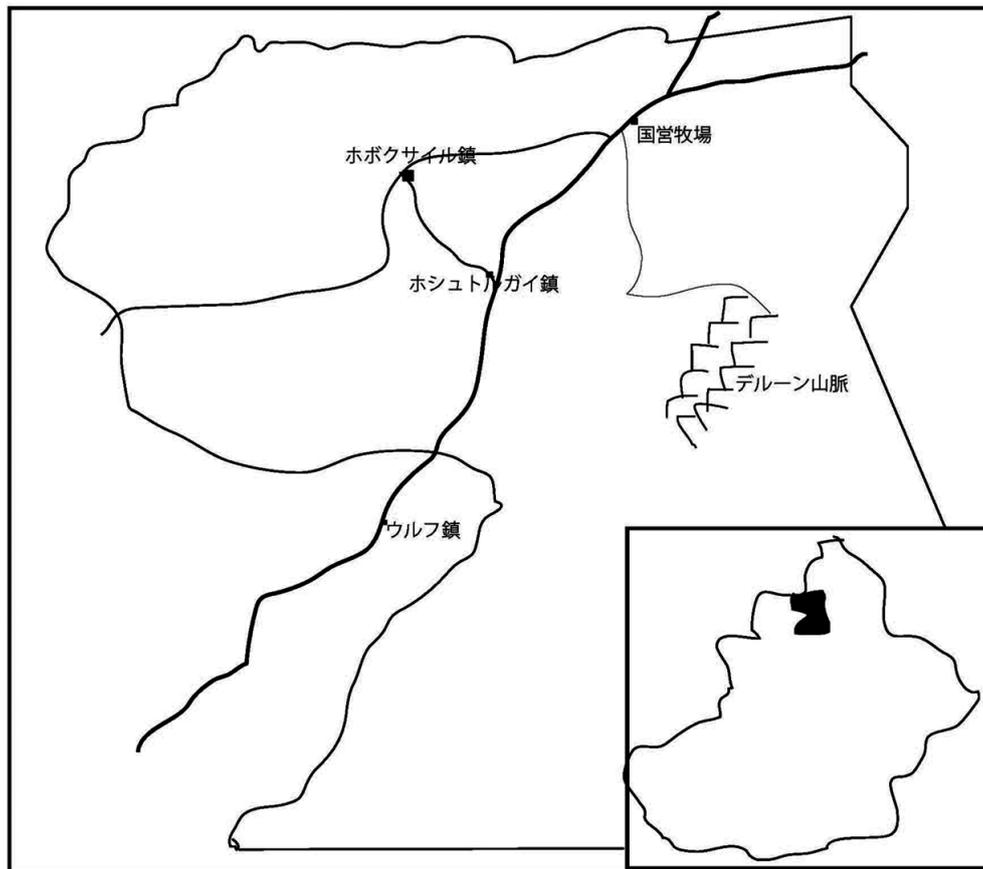


図1 新疆及びホボクサイル地図

し、N氏一家は先に行って（10月19日）、相手の方は翌日に行くことにした（10月20日）。

N氏の冬営地があるデルーン山脈から県城のホボクサイル鎮までは100km以上離れている。デルーン山脈から国营牧场（Utubuluv talvaa）¹¹⁾までバイクで、国营牧场から県城まではタクシーで、合わせて4時間ほどの行程だった。つまり夫婦は10月19日の朝に出発して昼頃にはついてくる（図1を参照）。それから、N氏一家はオワート寺の周辺に集まった人々と共に、ゲゲンの遺体の到着を待った。ゲゲンの遺体は夕方頃に県城に到着した。N氏一家は最後の謁見を行い、ゲゲンの遺体に祈りをささげてから夜にかけて冬営地へ帰った。ホボクサイルの遊牧民の中、N氏一家と同様に家畜の放牧を交代でしながらゲゲンとの最後の謁見を行った人々は多数おり、最後までいられる人々は最後の日まで哀悼の儀

礼に参加した。

本節では、県城に住む公務員であるA氏とデルーン山脈に冬営地を持つ遊牧民であるN氏の二人の事例を取り上げた。この二人の行動はホボクサイルにおける多くの人々の行動を代表できるものである。この二人と同じく多くの人々がゲゲンの円寂の知らせを最初聞いたときのことを語るとき、自身の悲しさを混ぜ合わせて述べている。こうした人々の行為、語り、悲しさなどをみると、シャリワン・ゲゲン14世の円寂が、現地のモンゴル社会に重大な影響を与えたことがわかる。

次の節では、ゲゲンの遺体を火葬する過程について聞き取り調査を通して得たデータを整理しながら、ゲゲンの靈魂に関する様々な説を分析する。

2.2 ゲゲン火葬を巡る、現地の象徴解釈

ゲゲンといった聖なる活仏の遺体を火葬する作業は一般の僧侶たちには担えない。修行を積んだ大ラマのみができるという。ホボクサイルではそうした修行を積んだ大ラマもしくは活仏はシャリワン・ゲゲンの他にいないため、青海の塔爾寺¹²⁾から専門家を呼び、彼らに要請した。ホボクサイル現地の仏教関係者らはそれら専門家の協力者として動いていた。

ゲゲンの遺体を火葬する作業は人々に公開せず、オワート寺の庭において行われた。そのため、今回の調査では火葬作業の詳細についてのデータを得ることができなかった。しかし、当時協力者として動いた人の一人であるO氏の協力により、火葬過程の概略を教えてもらった。火葬作業の過程は以下のようである。

- 1) 火葬する日付、場所と時間を決める。
- 2) 指定の場所で専門家が特殊な絵を描く¹³⁾。
- 3) 専門家の絵を書いた場所に専用の火葬場を造る。
- 4) 決まった時間の直前、造った火葬場に火を燃やす。
- 5) 火葬する前にSabutnといった専門の経典を読誦し、火葬の儀礼を行う。
- 6) ゲゲンの遺体を釈迦牟尼仏の形で胡坐させて火葬を行う。
- 7) 後に火葬した場所において霊塔を建て、ゲゲンの棺を置く。

以上の7つの過程を経て遺体の火葬作業が完了する。その他、こうした火葬作業の途中と、その後に発生した不思議な現象が多くの人々の注目を集めている。ここでは、そうした不思議な現象について検討したい。

(1) 馬型雲の形成

ゲゲンの遺体を火葬する途中で、火葬により立ちのぼった煙は徐々に固まり、高い空で白い馬型の雲を形作ったという。こうした現象の真

偽について判断するのは難しい。しかし、そうした語が残っていることをみると、少なくともその象徴的意味を推測できる。モンゴルは遊牧騎馬民族であり、昔から馬を大事にし、馬がモンゴルのシンボルとして考えられてきた。そういう意味では、ホボクサイル・モンゴルはゲゲンを馬と関連づけ、自分たちの精神的シンボルであるということを改めて主張しているように見える。もっとも、シャリワン・ゲゲン14世は1942年の午年に生まれだったことから、こうした語がたやすく人々に納得されたとも考えられる。

(2) 虹の形成

ゲゲンの遺体を火葬した直後、オワート寺からゲゲンのオールド (Ord)¹⁴⁾を結ぶように高い空で多色の虹がかかったという。こうした現象の真偽についても判断は難しいが、大活仏が円寂すると、「空に虹がかかる」現象は、歴史文献の中で度々みられる。清朝の時代、ダライ・ラマ7世が円寂したときの記録をみると、「…… こうして、ダライ・ラマの法身は胡座の状態（作修持状）で1日置くと、夜に彼の左右鼻孔から赤や白色の菩提水が流れた。こうした様子（瑞相）からダライ・ラマの靈魂が既に法界へ登ったことが証明された。その後、人々は翌明け方頃ポタラ宮の頂上に五色の虹（不思議な）を見た」と記している（蒲 2006）。このような記録をみると、シャリワン・ゲゲン14世の円寂で虹が現れる現象が語られたのは不思議なものではないのかもしれない。

「虹の出現」は歴史にも記録された現象であるが、「馬型雲の出現」は記録がない。しかし、筆者はこのような話の真偽を検討するつもりはない。ここで強調しておきたいのは、こうした不思議な現象が語られるということは、シャリワン・ゲゲンが最高の活仏として、現地のモンゴルの人々の心の中でいかに深く信仰されていたのかということを実に表しているということである。

次の節では、ゲゲンの哀悼活動の直後に現地
で流布したもう1つの物語について検討する。

2.3 転生に関する語り

ここで取り上げるのはゲゲン生前のある普通
ではない言動に関するものである。まずは、H
氏との聞き取り調査により、整理した事例を取
り上げる。H氏は県城におけるオワート寺に調
理師として勤めている。今回の調査では、H氏
にゲゲン円寂の一週間前（中国内地へ出張する
直前のこと）の、ゲゲンとの会話内容を教えて
もらった。H氏によると、そのときゲゲンは調
理室で調理していた彼に任務を与え、10月19日
に帰ってくるので、そのときそれを視察しよう
といったというのである。そして彼は、それは
すなわちこのような姿で会うこと（10月19日に
ゲゲンの遺体がホボクサイルへ戻ったため）を
指していたと、泣きながら話してくれた。

もう1つの事例は、2014年の夏の終り頃、シャ
リワン・ゲゲン14世がある若い夫婦の招来¹⁵⁾を
受け、訪ねたときのことである。ゲゲンはその
若い夫婦の家を訪ねて帰るとき、脱いで置いた
シャツとコート忘れて行ってしまったという。
後に夫婦二人はゲゲンのシャツとコートを持っ
て謁見したとき、ゲゲンはそのうちの1点のみを
受け取り、もう1つを夫婦二人に返して、来年に
赤い顔¹⁶⁾で会いましょうと言ったという。この
2番目の事例でのゲゲンの言葉の意味は、ゲゲ
ンの来世はこの夫婦の家に生まれることを暗示し
ている可能性があると言われ、大きな注目を集め
ている。チベット仏教界では、特に大活仏が円
寂の直前に示す不思議な行為を通し、自分の円
寂の時間やその転生である来世の行く先を暗示
すると一般に考えられている。それについては、
歴代ダライ・ラマ伝、歴代パンチェン・ラマ伝、
歴代ジャンジャ・ホトクト伝 (Janjaa qudstu)¹⁷⁾
などに書かれている。このようなシャリワン・
ゲゲン14世の普通ではない行為もこの従来の伝
統に沿って、発現しているように見える。それ

はシャリワン・ゲゲン15世の認定にも重要な手
がかりとなると考えられる。

本章では、シャリワン・ゲゲン14世の円寂に
よるホボクサイル・モンゴル社会の哀悼活動を
整理した。次の章では、その後の転生を願う祈
禱をめぐる活動について整理する。

3. 転生を願う祈禱をめぐる活動

ゲゲンの転生を願う祈禱をめぐる活動につ
いては、転生を願う祈禱の契機、転生を願う祈
禱をめぐる巡礼と転生を願う祈禱をめぐる戒律な
どの側面からみていきたい。

3.1 転生を願う祈禱の契機

ホボクサイルでは、シャリワン・ゲゲン14世
の円寂に対する哀悼活動が終わった後、しばらく
くし、転生を願う祈禱をめぐる活動が始まった。
その始まりは、シャリワン・ゲゲン14世が生前
最後に行った訓話に対する人々の思い出であっ
た。2014年8月、シャリワン・ゲゲン14世はバヤ
ン・オンドル (Bayan öndür)¹⁸⁾ のオワー祭祀¹⁹⁾
において生涯最後の訓話を行った。現地の人々
の間ではシャリワン・ゲゲンのオワー祭祀や正
月における様々な訓話をVIDEO、カメラや携帯
電話などに撮影し、記録することが一般化して
いる。D氏はその内の一人である。D氏は県城の
ホボクサイル鎮において個人の店を経営してお
り、年齢は30代半ばである。彼はここ数年、シャ
リワン・ゲゲンの様々な訓話を撮影し、CDにま
とめて販売するという形で、シャリワン・ゲゲ
ンの思想を現地の人々に伝えてきた。特にD氏
のまとめたCDはシャリワン・ゲゲン14世に対す
る思い出の柱になったと言っても過言ではない。
筆者は今回の調査で、D氏の店を訪ね、そのCD²⁰⁾
を手に入れた。

シャリワン・ゲゲン14世の生涯最後の訓話は、
大きく3つの内容で構成されている。ここに、シャ
リワン・ゲゲン14世の最後の訓話を日本語に訳
してみた。それは以下のようなものである。

(1) オトク化思想 (Otuk)²¹⁾ への傾向をなくすべきだ。

我々がこのオワー祭祀を始めて4年目となる。しかし、ある人らはこの祭祀を利用して、オトク化思想を強めようとしている。我々はオトク化思想の影響に注意する必要がある。モンゴルの歴史において、大政権の崩壊は多くの場合オトク化思想に端を発する。例えば、モンゴル系民族の最後の遊牧王朝であるジュンガル帝国政権の崩壊の要因をみても、まさにオトク化思想と関連する。ジュンガル帝国 (Zünvar qaant ulus)²²⁾ 隆盛期、その領土は西はウラル山脈、北は北極海、東は万里の長城、南は青藏高原までの広大な地域を支配していた。しかし、ジュンガル政権は内部のオトクとオトクとの政権争いで分裂し崩壊した。この歴史は今日の我々にとって極めて重要な教訓となると思われる。

現在のホボクサイルの14ソム (佐)²³⁾ は、1770年代に満州の侵略者 (清朝) がトルグド部の一部分をホボクサイルへ移住させ、トルグド北路盟を設立した時点で旧モンゴル社会のオトク制を基準として、14ソムに分けたことが始まりである。我々の多くは、イジル河²⁴⁾ 周辺のバガ・ツォーフル (Bar čo-qur)²⁵⁾ という地域に遊牧していた人々の子孫である。その中、六ソム旗の大右翼ソムと王の旗の大右翼ソムのみがハラ・ガザル (Qarvazr)²⁶⁾ という地域に遊牧していた人々の子孫となる。つまり、ホボクサイル・トルグドの多くが従来から一人の首領の下にいたことは事実だ。しかし、最近、タイジインキン²⁷⁾ はゲキレーキン・ソムから、ナムダキン²⁸⁾ はシェベヌルから、それぞれに自立しようとしている。私 (シャリワン・ゲゲン14世) はその関係について説明したい。まず、ナムダキンとシェベヌルとの関係を言うと、ダライ・ラマ5世の時代、イジル河畔におけるトルグド部の首領はソホル・サンダグ (Soqur sandv)²⁹⁾ という人をチ

ベットへ派遣し、チベットから仏像や経典などを請来し、イジル河畔にチベット仏教寺院を建てた。後にイジル河畔のトルグド部の多くは今日の新疆へ移住する (1771年) と、バガ・ツォーフルの各オトクからナムダキンという家の下で人を集め、シェベヌル・ソムを構成した。現在はナムダキンとシェベヌルはそれぞれに自立する必要がないし、私も認めない。次は、タイジインキンとゲキレーキンとの関係を言うと、清朝時代にホボクサイルにおける三つの旗では王家の子孫が多くて、皆を官職に任命することが不可能となり、官職に任命されなかった王家の子孫が一般のタイジとされた。そして、これらタイジたちの経費をザサクの旗ゲキレーキン・ソムから選ばれた十数戸が負担することになった。後にタイジらとタイジらの経費を負担する人たちが貧しくなり、ホボクサイル南部へ移住し、農業に従事し始めた。これらの人々を一般にタイジインキン・ソムと呼ぶ。しかし、タイジインキンは文化大革命までは、ゲキレーキン・ソムに所属してきた。従って、現在タイジインキンとゲキレーキンはそれぞれ自立する必要はないし、私も認めない。その他、ある人々がホボクサイルに16ソムがあるはずだと議論していることを度々耳にする。このような見方を私は認めない。ホボクサイルは14ソムを有するトルグド人の故郷と昔から知られてきたからである (シャリワン・ゲゲン14世が語った14ソムについては表1を参照)。

(2) イスラム系民族の「三股勢力」に影響されることに注意する必要がある。

従来、中国政府に「民族分裂勢力、宗教極端勢力、暴力恐怖勢力」というイスラム系民族の「三股勢力」と指定されている勢力が活動する中心地は南新疆とされてきた。最近「三股勢力」の影響は北新疆までに広がっており、今年アルタイ地区 (Altaa aimv)³⁰⁾ から

表 1

分類	旗の名	ソム（佐）の名	ソム（佐）における分類
旧ホボクサイル盟の行政構成	Ong-yin qošu- 王の旗	Iki baru-n 大右翼	
		Bav baru-n 小右翼	
		Iki zü-n 大左翼	
		Bav zü-n 小左翼	
	Zasar-yin qošu- ザサクの旗	Bö-rsü ブールス	
		Ma-ninkin マーニンキン	
		Jalakin ジャラキン	
		Gekire-kin ゲキレーキン	Tajjinkin タイジンキン (ゲキレーキンの一部)
	Zurva-n sum 六佐の旗	Iki baru-n 大右翼	
		Bav baru-n 小右翼	
		Iki zü-n 大左翼	
		Bav zü-n 小左翼	
		Ševnür シェベヌル	Hamda-kin ナムダキン (シェベヌルの一部)
		Qošu-d ホシュド	

20数人、タルバガタイ地区 (Taruvtaa)³¹⁾ から10数人が「三股勢力」に参加したとされ、捕らえられた。そのため、皆に注意して欲しい。「三股勢力」の目的はイスラム民族の独立を図ることである。1860年代から、新疆を中心としたイスラム系民族のチャルハ・トルキスタン (東トルキスタン) 独立運動は4回発生した。我々の時代に最も近いのは、1946年前後にイリを中心として建立されたチャルハ・トルキスタン・イスラム・ジャムホルヤト政権である。現在は5回目の独立運動をしようとしている。今日の中国では、中国共産党政権の隆盛期であり、昔の弱体化された清朝末期と異なる状況にある。とにかく、我々は「三股勢力」に影響されずに距離を置き、自分たちの身を守ることが重要だ。

(3) 飲酒による問題を制限する必要がある。

今年の夏、私はホボクサイルで過ごした。ホボクサイル・モンゴルの飲酒による問題は

従来と比較すると減少する傾向にある。例えば、今年は飲酒運転により、死亡した人は2名で、障害を受けた人は6、7名である。この数字を従来と比較すれば極めて減っていることは確かである。しかし、飲酒運転による交通事故をなくすべきだ。飲酒運転により交通事故を起し、体に障害を受けたり、命を失ったりすることをみると、我々は未だ愚かであるのがわかる。仏の教えによると、人間の全ての苦しみの根源は、「貪・瞋・癡 (欲、怒り、愚かさ)」という三毒によるという。酒を飲むことというのは、人が酒を通して、自分の精神的な緊張を緩めようとする欲から始まっており、命を失うのはその愚かさによる。つまり、悪い行為による悪い結果であるとも言える。

また、今日のホボクサイルでは、大量の飲酒によって、体が麻痺してしまった人が何人もいる。この人たちの麻痺の多くは、長年結婚式などに参加して長期的に飲酒を続けた結果である。結婚式はモンゴルの伝統的文化で

あるが、結婚式に参加することで体に障害を受けたり、病気となったり、命をなくしたりすることは決してモンゴルの伝統的文化に則った行為ではない。そのため、我々は結婚式の規模や支出などを制限しなければならない。多くの年長者によると、文化大革命以前の結婚式では大量に飲酒する習慣はなかったと言われていることから、それは文化大革命以後に形成された習慣にすぎない。現在のホボクサイルにおける結婚式は従来の伝統的な習慣を失っており、大量に飲酒することによって代わられている。我々は自民族文化の優れた点を発揚し、欠点を修正していかなければならない。特に他民族の文化を取捨選択しつつ受け入れることが重要である。

最後になるが、特に飲酒問題についての私からの願いを祭祀に来られなかった親戚や友人に伝えてほしい。

では、皆様のこれからの健康を心よりお祈りします。また、来年の祭りに赤い顔で会いましょう！

ありがとうございます！

このようにシャリワン・ゲゲン14世は生涯最後の訓話で、オトク化思想の弊害、イスラム系民族の民族主義運動と距離をおくことと、飲酒の弊害など3つのポイントを語った。これらは彼が全生涯にわたって主張し続けたことでもある。

特に飲酒運転の撲滅と伝統的な結婚式における飲酒の制限というゲゲンの主張はポスト・ゲゲンの時代において、人々の生活に大きな影響があった。本文の「はじめに」に述べたように「活仏が円寂すると、その来世の行く先は活仏の意志による」という考え方があることから、ゲゲンの靈魂を喜ばせて、ホボクサイルへ戻るように祈祷しなければならない。そこで、現地の人々は早速飲酒に対するゲゲンの教えに沿って、特に結婚式や正月などにおける飲酒を禁止し、ゲゲンの聖なる靈魂を喜ばそうという動きを始め

た。D氏のまとめたCDが転生を願う祈祷をめぐる活動の契機となったのである。

次の節では、転生を願う祈祷をめぐる活動の始まりである、人々の青海の聖地への巡礼について検討する。

3.2 転生を願う祈祷をめぐる巡礼

上述のように、シャリワン・ゲゲン14世は最後の訓話において、ホボクサイルの14ソムが満州人の侵略者が作りあげたものであると述べ、彼がそれに対する違和感を持っていたことを示唆していた。しかし、ホボクサイルの14ソムを復活させたのはほかならぬシャリワン・ゲゲン14世であった。

歴史を遡ると、清代（1770年代）に成立した14ソムを基盤とするホボクサイルの盟旗体制は、1912年に清朝政権が崩壊するとすぐに崩れたのではなく、1949年に中華人民共和国が建国されるまで維持された。中華人民共和国が発足した後、国内ではすべての資産を国有化する目的で、集団化政策が実施された。その具体的な政策としては、1958年から1983年までにホボクサイルを含む中国のモンゴル社会に実施された人民公社体制があった（仁欽 2008: 1）。この時代、遊牧民は家畜と牧地を人民公社へ提供し、人々の個人資産というものは否定され、すべては国有化された。そこで、ホボクサイルにおける14ソムを基盤とする旧社会体制が完全に崩れたのである。

1983年に中国のモンゴル地域では、「草畜双承包」という新たな政策が実施され、経営者である牧民が牧地経営と放牧地管理の自主権を持つようになる。それに伴い、人々の出自意識が改めて高まり始める。特に1980年代中末期からホボクサイルでは、シャリワン・ゲゲン14世の指導の下でオワー祭祀が旧ソムの単位で（表2）、チベット仏教寺院が旧旗の単位で（表3）、それぞれ復活された。いいかえれば、シャリワン・ゲゲン14世はホボクサイルの旧社会構造を再構

表 2

分類	寺院の名	巡礼者
行政 (旧)	Ovat-yin küra- オワート寺	旧王の旗の後裔
	Iki küra- 六佐の旗大寺	旧六左の旗の後裔
	Zasar-yin küra- ザサクの旗寺	旧ザサクの旗の後裔
	Lavruieg küra- ラブルン寺	ホボクサイルの全モンゴル

表 3

分類	旗の名	オワー名	参加者	
行政 (旧)	王の旗	大右翼のオワー	旧大右翼の後裔	
		小右翼のオワー	旧小右翼の後裔	
		大左翼のオワー	旧大左翼の後裔	
		小左翼のオワー	旧小左翼の後裔	
	ザサクの旗	ブルスのオワー	旧ブルスの後裔	
		マーニンキンのオワー	旧マーニンキンの後裔	
		ジャラキンのオワー	旧ジャラキンの後裔	
		ゲキレーキンのオワー	旧ゲキレーキンの後裔	
	六佐の旗	大右翼のオワー	旧大右翼の後裔	
		小右翼のオワー	旧小右翼の後裔	
		大左翼のオワー	旧大左翼の後裔	
		小左翼のオワー	旧小左翼の後裔	
		シェベヌルのオワー	旧シェベヌルの後裔	
		ホシュドのオワー	旧ホシュドの後裔	
			パヤン・オンドルのオワー	ホボクサイルの全モンゴル

築することによって、ホボクサイルのオワー祭祀、宗教信仰といった伝統文化を復興させたわけであった。

シャリワン・ゲゲン14世はオワー祭祀を、訓話を通して自分の思想を宣伝する場とした。その中でザヤング (Zangü)³²⁾ とクンド (Kündü)³³⁾ といった旧ソムの役人はオワー祭祀の当番とすることによって、シャリワン・ゲゲン14世と祭祀との関係を緊密のものとし、組織的な上下関係を築いた。つまり、ホボクサイルにおけるオワー祭祀を基盤とする社会構造は、上にゲゲン、その下にソムのザヤングとクンド、その下にソムの庶民という体制で構成されたのである。そ

れはまた、事実上14ソムの復活でもあった。

この体制は大きな影響力を持っていたため、シャリワン・ゲゲン14世が円寂した後、ホボクサイルの14ソムにおける旧官職であったザヤングとクンドらの動きが著しくなりつつある。その動きの一つとして、彼らがホボクサイルの信者を代表して青海の聖地まで巡礼することをあげることができる。

ザヤングらは2014年末にチベット仏教聖地の1つと考えられてきた青海省の塔爾寺へ巡礼し、当該寺のヤンジャ・ゲゲン (Yanjaa gegen)³⁴⁾ に謁見した。その中で、ザヤングらは現地の人々がシャリワン・ゲゲン14世を失ったことで、悲

痛な気持ちに落ちた現状をヤンジャ・ゲゲンに伝え、これからシャリワン・ゲゲンの転生を願う祈禱のために必要になることを尋ねた。そこで、ヤンジャ・ゲゲンはザンクらの願いに沿って、転生を願う祈禱に注意しなければならないこととして寺院に5つ、信者に5つの要点を指示した。その内容は以下である。

(1) 寺院に対する要点

- a. 大蔵経典 (yanjur danjur) を読誦すること。
- b. 常に寺院の浄化のための経典を読誦すること。
- c. ジンセルク (Jinserk) の経典を読誦すること。
- d. 常にダルの経典 (Dar-yin nom) を読誦すること³⁵⁾。
- e. 常にゲゲンの霊祭 (Gegen-na sakuusn) を行うこと³⁶⁾。

(2) 信者に対する要点

- f. 家ごとに僧侶を招来し、金光明経 (Altn gerel) を読誦してもらうこと。
- g. 常に真言 (Maani) を唱えること。
- h. 3年間不飲酒の戒律を守ること。もし、引き続き禁酒ができればもっとよい。
- i. 正月は本来のモンゴルの伝統に従って過ごすこと。
- j. 信仰を強化すること。

ホボクサイルの14ソムのザンクらは聖地に巡礼し、シャリワン・ゲゲンの転生を願う祈禱をめぐる活動に必要となる以上の要点を現地の人々に宣伝した。このヤンジャ・ゲゲンの指摘した要点と、シャリワン・ゲゲン14世の生涯最後の訓話での教えが次第に合体し、民間における転生を願う祈禱をめぐる戒律へと発展していく。次の節では、転生を願う祈禱をめぐる戒律について検討する。

3.3 転生を願う祈禱をめぐる戒律とその影響

戒律といえば、仏教修行者の守るべき戒律や、一般信者が守るべき戒律など様々である。後者についても、遊牧生活や信仰と関連する戒律が

多数ある。それらは、主にはある個人やある家庭の幸福を祈る目的を持つものが多い。しかし、本節で取り上げる戒律は個人や家庭のレベルを越えた地域社会的レベルの戒律である。

シャリワン・ゲゲン14世は生涯をかけて飲酒による弊害の撲滅をホボクサイル・モンゴル社会に主張してきた。そこで、現地の人々はこのゲゲンの主張を徹底的に実施することでゲゲンの聖なる靈魂を喜ばそうとして努力している。そのため、結婚儀礼や正月などの伝統的な行事における禁酒がホボクサイル・モンゴル社会全体を律する「戒律」となりつつある。以下、結婚儀礼を例にして、この「戒律」によって起きた変化について検討する。

結婚儀礼は人類社会共通の儀礼であり (サラングレル 2011: 42-100) その過程や習慣が、異なる社会集団や国々の間で大きく異なる。それどころか、1つの民族集団の中でも違いがある。モンゴルの場合、従来は主に事前の準備儀礼と、結婚式という2つの段階によって行われてきた (サラングレル 2011: 42-100)。

事前の準備儀礼

- a. 男性側の家長が女性側の家を訪ね、話し合う
- b. ハダグ・ジョソ (Qadv žusu) という婚約の儀礼を行う
- c. 結婚の日を決め、男性側から女性側に贈り物をする
- d. 主に男性側で、息子に新しいゲルを作る儀礼を行う。
- e. 結婚式の前日、男性側は女性側に供物を送る (主に成熟した羊肉一頭分)

結婚式

- a. 新しく作ったゲルに対して祝詞をあげる
- b. 初乾杯する
- c. 供物 (成熟した羊肉) に手を付ける
- d. 新郎にベルトをあげる儀礼と帽子を奪い取る儀礼を行う

- e. 新しいゲルに親戚が贈り物をする
- f. 荷物を載せる
- g. 嫁の移動と戸口をふさぐ儀礼を行う
- h. 嫁の見送りをする
- i. 昼を過ごす
- j. シャガー・チムグ (Šavaa čimüg) を持たせる儀礼をする³⁷⁾
- k. 嫁にさじを持たせる儀礼をおこなう
- l. 結婚式の終了儀礼
- m. カーテンを開く儀礼³⁸⁾

以上に取り上げたのは、これまでよく研究されてきた従来のモンゴル社会における伝統的な結婚儀礼である。ホボクサイル・モンゴル社会の結婚儀礼は他のモンゴル社会で普遍的に行われてきたものと多少相違があるが、基本的に一致する。しかし、その中で特に指摘しておきたいのは、シャリワン・ゲゲン14世が指摘してきたように、文化大革命以後、大量に飲酒することが結婚儀礼の一部となってきたという点である。通常の結婚式では白酒は数十本が空くことは珍しくなかった。この大量の飲酒が、ホボクサイル・モンゴル社会に与えた弊害は甚だ大きい。

筆者は今回の調査で、H氏夫婦、U氏夫婦の結婚式に参加し、参与観察を行った。両者の結婚式の過程は基本的に一致しており、事前の準備過程もほぼ同様である。以下は、両者の結婚式に基づき、その内容を整理して記述したものである。

事前の準備儀礼

- a. 男性側の家長が女性側の家を訪ね、両家の縁組みについて話し合う。主な贈り物として牛乳のみを持って行った。
- b. 男性側の家長が女性側の家を訪ね、結婚の日を決めた。ここでも贈り物として牛乳のみを持って行った。

結婚式

結婚式当日に男性側の親戚と女性側の親戚が指定のレストランに集まり、結婚式を行った。ここでは、結婚式の開始前に、両家の代表として一人が式壇に上がり、ゲゲンが円寂した影響を受け、本結婚式ではゲゲンの言い残したことを重視することと、そして禁酒とすることを来客に説明した。

- a. 二人の紹介
- b. 女性側の母方の親戚からの祝詞、父方の親戚の祝詞
- c. 男性側の母方の親戚からの祝詞、父方の親戚の祝詞
- d. 昼を過ごす（昼食をとる）
- e. 二人は来客の席を巡り、祝杯儀礼を行う（かつてはお酒で乾杯したが、今回は牛乳に取って代わった）
- f. 女性側の母方の親戚からの祝歌、父方の親戚の祝歌
- g. 男性側の母方の親戚からの祝歌、父方の親戚の祝歌
- h. 男性側の親戚から嫁に贈り物をする
- i. 結婚式終了の祝詞

この事例は、県城のレストランにおいて行われたものであり、両家の自宅においてとり行われた結婚式を記述したサランゲレル（2011）と場所の点で相違がある。春の結婚式であるため、牛乳酒³⁹⁾、馬乳酒⁴⁰⁾、ヨーグルトなどは見られず、牛乳が中心となった。しかし重要な点は、シャリワン・ゲゲン14世の生前における主張とヤンジャ・ゲゲンの指摘に従って、両家が禁酒を「戒律」として、酒を提供しなかったことである。また従来のホボクサイルでは、結婚式では、人々の喜ばしい笑顔と、様々の気持ちを表すことが不可欠で、非常に賑やかなのだが、この両家の結婚式では、ゲゲン円寂の影響を受け、人々はそうした気持ちを出すのを避けている様子が見て取れた。

ホボクサイルにおける正月行事の変化について

では、今回の調査では観察することができなかった。が、筆者の得た情報によると、今年のホボクサイルでは正月において、飲酒と酒の贈り物が禁酒の「戒律」のために禁止されたという。ホボクサイルでは贈り物や飲酒の際に主に使われてきたのは、現地の王府醸酒廠製の「王府老窖」⁴¹⁾というブランドの酒だった。今年の正月では、「王府老窖」の売上を支えてきたホボクサイル・モンゴルが禁酒を戒律とした影響を受け、王府醸酒廠が経営不振に陥ったという噂を度々耳にした。

このようにシャリワン・ゲゲン14世が円寂した後、転生を願う祈禱をめぐる人々の動き、特に飲酒に対する戒律が、現地の社会生活や経済に明らかな影響を及ぼしていることがわかる。しかし、シャリワン・ゲゲン14世にはなぜこれほど強い影響力があるのだろうか。

次の章では、中華人民共和国の建立以後の新疆社会の変容を検討し、そうした中で、オイラド・モンゴル社会における宗教指導者であるシャリワン・ゲゲン14世の影響力を検討する。

4. シャリワン・ゲゲンの影響力について

4.1 新疆社会の変容

1949年に中国本土で社会主義政権が成立した後、1955年10月に新疆ウイグル自治区が設立された。新疆地域はかつて、ウイグル、カザフを始めとするイスラム教徒と、モンゴルを始めとする仏教徒を有する地域だった。民族の分布をみると、南新疆はウイグルを、北新疆はカザフを、それぞれ中心としてきた。また、オイラド・モンゴルは北新疆の一部と南新疆の一部に分布してきた。そして、これらの民族の暮らす地域には明確な境界が見られた。

漢族が大量に新疆へ流入したのは、1949年以降のことであった。共産党政権は1950年代初期に、少数民族地域における社会主義建設および辺境防衛という名目で、主に新疆北中部に生産建設兵団を設立し、漢族を政策的に入植させた。

表4 新疆における主な民族の人口変化

	1953	1964	1982	1997
ウイグル	360.8	399.1	595.0	802.0
漢族	33.2	232.1	569.5	660.1
カザフ	50.6	48.9	90.3	127.1
回族	13.4	26.4	57.1	77.1
キルキズ	7.1	7.0	11.3	16.3
モンゴル	5.8	7.1	11.7	15.8

※単位：万人

またその当時、自発的に新疆へ流入したのも多かったという（新免 2003: 479-523）。その後、1960年前後の大躍進の失敗（1959-1961）や文化大革命（1966-1976）の混乱の時期と、1978年から実施された改革開放政策や1998年から実施された西部大開発政策などの時点で、漢族はさらに自発的に新疆へ流入した（表4）。そうした経緯によって今日、漢族は新疆の主要な民族の1つとなってきた。政府は新疆ウイグル自治区設立の当初、現地の少数民族が集住する地域で、自治州、自治県レベルの区域自治の政策を実施し、少数民族に一定の自治権を付与した。しかし、一方で実施した移民政策によって、漢族の人口が増大し、漢族は各自治州・各自治県において多数派となり、自治権は名目だけのものとなってきた。各地域における漢族の影響力は政治・文化・教育・経済などの面で大きくなりつつある。

前述した中国の社会体制の変化をみるとわかるように、1950年代中期から1980年代中期まで、農村と遊牧地域において実施された集団化政策の影響はきわめて大きい。集団化政策は主に人民公社体制に現れている。人民公社体制は経済発展の側面からみれば、停滞あるいは衰退の時代であるかもしれないが、民族政策の側面からみれば、少数民族を中華人民共和国の国民とし、巧みに統合できた時代でもあったかもしれない。文化大革命の時代には、少数民族の民族意識や出自意識は階級闘争の下に隠されてしまっていた。

ところが文革大革命後、中国政府は1978年から改革開放政策を実施し、経済発展を政策の柱に据えた。続いて、1982、83年から農村や遊牧地域で、人民公社体制を廃止し、郷・村の体制を導入した。こうした農村地域における体制変化は単なる社会制度の変化に止まらず、人々の社会や民族に対する意識をも変化させた（小林1997: 562-633）。具体的には、農村では農耕地の請負制と、遊牧地域では牧地や家畜の「草畜双承包」制が導入された。それによって、人々には個人所有という意識が生まれた。さらに、社会生活の面でも、集団化時代に強調された階級闘争の意識が薄くなり、それまで封じられてきた民族意識が復興する傾向が生じた。

いずれにせよ、漢族の増加、社会体制の変化、経済発展などの状況によって、新疆では、かつてないほど、物資の流通や人間の交流が盛んになり、新たな社会環境が生まれてきた。その中で、漢族は国家の主体的民族であるため、次第に新疆社会の経済や政治の主導権を握っていった。その結果、少数民族の漢族への同化が急速に進められた。

ただし他方で、漢族が少数民族との接触の中で、少数民族を見習ったり、その文化や習慣を受入れたりする現象もみられる。例えば、食文化に関する事例を指摘することができる⁴²⁾。さらに、少数民族が漢族との相違を感じて、自分たちの出自意識あるいは民族アイデンティティなどを主張する現象も現れてきた。ここ数十年間、新疆の民族問題として注目されてきたのはウイグル問題である。ウイグル問題に関して、中国側では、単なる民族分裂主義か、国家分裂主義として一般に定義している。しかし、新疆における民族主義の高揚はウイグルだけに限らず、その他の民族にも見られる。特にホボクサイルを含む新疆のオイラド・モンゴルの民族主義の復興は仏教指導者のシャリワン・ゲゲン14世の指導の下で独自の道を歩みつつあったともいえる。

次の節で、新疆におけるオイラド・モンゴルの民族主義高揚にあたって、シャリワン・ゲゲン14世が如何なる影響力を持っていたのについて検討する。

4.2 新疆におけるオイラド・モンゴルの民族主義高揚とシャリワン・ゲゲンの影響力

新疆におけるオイラド・モンゴルの民族主義の高揚に関しては、隣のウイグルと比較すれば、より穏やかであることがわかる。人口がウイグル人より遥かに少ないのが、1つの原因であるかもしれない。しかし、最も重要な原因として、やはり歴史的な要因を指摘しなければならない。周知の通り、清朝期の前半において、その対外政策の中心はジュンガル、青海ホシュド（Kökünur-yin qošu-d）⁴³⁾をはじめとするオイラド系諸政権との関係であった。そして、清朝は康熙帝、雍正帝、乾隆帝の三代の治世を通じてオイラド・モンゴルと100年近く対立し、18世紀中葉ようやく彼らを支配下に入れる。その中で、オイラド・モンゴルを恐れた清朝は彼らの反乱を防ぐため、彼らに対して虐殺を行い、60万人近くのオイラド・モンゴルを殺したという⁴⁴⁾。その後、その惨禍から残ったものとイジル河畔から帰還したトルグドを含むオイラド・モンゴルに対して清朝は、満洲八旗に準ずる盟旗制度を導入し、分割支配の体制をとった。

オイラド・モンゴルはこうした虐殺によって、大きな打撃を受けたし、また、分割政策によって、各地に分散する彼らは次第に少数派となっていった。そうした歴史を経験したことで、今日各地に分布するオイラド・モンゴルは誰よりも平和を求めるようになった。そのため、現在の新疆においては、民間に、「ヒツジのように優しいモンゴル（主にオイラド・モンゴルを指す）」といういい方まで見られる。これは、今日のオイラド・モンゴルが個人レベルでも、集団レベルでも、対外的に暴力や武力で対抗する意思や覇気を持っていないことを意味する。このよう

に意気消沈し沈滞していたオイラド・モンゴルを、1980年代から導く使命を受けたのが、シャリワン・ゲゲン14世であった。

一方では、田中（2010）は、次のように述べている。つまり、中華人民共和国期以降の新疆の歴史は、民族的・文化的・宗教的に異なる少数民族を中国共産党がいかに統合していくかの歴史でもあり、民族政策抜きに語るができない。民族問題に関する基本目標は一貫して、①少数民族地域を含む国家の領域的統合の強化、②冷戦や中ソ対立など、外敵に備えての辺境の安全確保、③全領域で忠誠心を持つ均質な人民の形成（国民形成）の三つであり続け、また文革期を除いて次の三点を基本原則にしてきた。第一に民族間の政治的、経済的平等の実現、第二に民族・宗教リーダーとの上層統一戦線、そして第三には民族区域自治政策である。これは集住する少数民族に地域を区画して一定の自治を与え、単一国家に統合するというものである（田中 2010: 63-76）と指摘している。この中で、宗教リーダーを政治的に利用するという共産党の方針は重要である。共産党政権が、この方針を新疆において実現したのは、1980年代のことである。つまり、1983年に新疆仏教協会を設立して⁴⁵⁾、当時グンブン・ゲゲン9世（Günbün gegen）⁴⁶⁾を会長、シャリワン・ゲゲン14世を副会長とした。1988年からはシャリワン・ゲゲン14世が会長になり⁴⁷⁾、2014年10月17日に円寂するまで務めた。

政府側は、世俗的活仏らがチベット仏教を信仰するオイラド・モンゴル人の精神世界において占める高い地位を無視できなかった。そのため、彼らを優遇し、また、政治的にコントロールしなければならなかった。他方、シャリワン・ゲゲン14世を代表とする世俗的活仏らもこのことを明確に把握していた。そのため、世俗的活仏らは、彼らを支えている信者と、彼らを巧みにコントロールしようとする政府との間で、如何にバランスをとるかということに常に腐心し

ていたともいえる。

1980年代末期になると、グンブン・ゲゲン9世が円寂し、シャリワン・ゲゲン14世は新疆のオイラド・モンゴル世界における唯一の高い地位を持つ活仏となり、独自の道を探求し始めた。彼が導いた民族運動のポイントは、前述のような覇気を失ったオイラド・モンゴルの自信をいかに回復するのか、また、政治的な動きに敏感な地域である新疆において、彼らの行っている活動が民族分裂主義ではないということを、いかに政府や周辺の人々に理解させるかということであった。このときのシャリワン・ゲゲン14世の真意は、彼がいつも口にしてきた「鳩のように白くならず、カラスのように黒くならず、むしろカササギのように多色になって欲しい」というモンゴル伝統の諺によく表されている⁴⁸⁾。

ホボクサイルにおけるモンゴルの民族復興活動は、主にオワー祭祀の回復とチベット仏教寺院の再建だった。こうした状況の中で、シャリワン・ゲゲン14世は政府にも優遇され、当然ながら指導的な地位についた。シャリワン・ゲゲン14世は、前述のようにオワー祭祀を旧ソムの単位で、寺院を旧旗の単位でそれぞれに回復し、清朝時代の旧社会体制を再び効力のあるものへと変えたのである。そして、オワー祭祀における訓話を通して自分の思想を広めるという戦略をとった。オワー祭祀を通じて始まった訓話は、後にゲゲンの正月における挨拶、人々の自宅への招来と日常謁見の際にも行われるようになっていく。ナムジャウ（2015）は、シャリワン・ゲゲン14世の人々に対する訓話を場と主体性に基づき、オワー祭祀と正月と日常生活をめぐる訓話、自宅への招来と日常の謁見、医療・災害をめぐる訓話に分類して分析を行い、シャリワン・ゲゲン14世がホボクサイル・モンゴルの信仰を代表する明示的なシンボルであるという結論を出した（ナムジャウ 2015: 97-117）。これはミクロな視点からの分析結果であるが、他方で、チベット仏教界と国家との関係などを視野にい

れたマクロな視点からの分析も必要であろう。

シャリワン・ゲゲン14世は中国政治協商会議議員、新疆ウイグル自治区政治協商会委員、新疆ウイグル自治区仏教協会会長といったあまり実権がない官職を務めてきた。だが、毎年中央政府や新疆政府において、定期的な会議に参加することで、政府の民族政策などをはっきり把握するようになった。それにより、政府の民族政策の方針に関して、公的文書より早く民間に伝えることができたともいえる。さらに現地の人々の悩み、社会問題などを十分に理解し、民族運動の規模、性質なども十分にコントロールしてきたといえる。そのため、ここ数十年間の活躍の中で、シャリワン・ゲゲン14世は次第に単なる宗教リーダーから、新疆におけるオイラド・モンゴルの民族リーダーへと移行したといえるであろう。

5. おわりに

本稿では、新疆のオイラド・モンゴル世界における世俗的活仏であるシャリワン・ゲゲン14世の円寂を受けて、彼の出身地であるホボクサイル・モンゴルの間で行われた哀悼活動と、転生を願う祈禱をめぐる活動などについて、現地調査を通して得たデータを整理した。その上で、現地の人々が見せる個々の行動、例えば重要な生活や仕事などを放っておいて、ゲゲンの遺体に最後の謁見をする、あるいはホボクサイルの全モンゴル社会のレベルで禁酒の戒律を新たに設定するなどの行動がなぜ始まったのかといった疑問を解くため、シャリワン・ゲゲン14世の影響力に関して検討を行った。

活仏思想は、チベットからモンゴル社会に導入されたものである。そのため、活仏の生涯最後の不思議な行為の意味の解釈、活仏の遺体を火葬する過程、活仏の転生に対する儀礼などの重要な点に関しては、すべてチベット仏教の伝統に従って行われた。それに対して転生を願う祈禱に際して実施された禁酒に関する戒律は、

ホボクサイル社会において最も影響を及ぼしているものの、ホボクサイル・モンゴルだけの特殊な事例であるといえる。

飲酒の弊害に関しては、モンゴル社会において従来から認識されてきた問題であり、いつの時代もうまく解決できなかった。例えば、13世紀におけるモンゴル帝国の時代、飲酒を制限する法律まで導入された歴史がある⁴⁹⁾。ホボクサイル・モンゴルではゲゲンの転生を願う祈禱をめぐる儀礼として、「禁酒」の戒律が導入された。モンゴルの歴史を通じて完全に実施することができなかった禁酒がついに戒律として設定されたのである。こうした様々な儀礼の由来や動機などを要約すると、チベット式でありながらモンゴル式であるという、両文化の要素が見られる。

また、そこに、オイラド・モンゴル出身で、チベット仏教界の世俗的活仏という、シャリワン・ゲゲン14世の指導思想の跡を見て取ることもできる。特に転生を願う祈禱をめぐる活動は、シャリワン・ゲゲン14世の指導の下で、30年にわたって蓄積されてきた民族主義思想の体现であるとも考えることもできる。従って隣のイスラム系民族の運動と比較すれば、暴動、流血などが見られず、人々の心の中の信念を伴う比較的穏和な民族運動と考えてもよいだろう。

チベット仏教界では、活仏の概念が生まれて700年以上の歴史がある⁵⁰⁾。その長い歴史の中で、世俗的活仏は次第に政治権力を握り、政教政権を確立してきた。つまりチベットで300年以上続いたダライ・ラマの政教政権である⁵¹⁾。20世紀中期に中国の社会主義政権の支配下に入った後、活仏の影響力は衰退した。しかし、中国共産党政権の、少数民族地域における宗教リーダーを政治的にコントロールするという政策の下で、新たな段階に入っていく。チベット仏教界において活仏は、一般に聖なるものであると同時に、世俗的な存在であるとされているため、信者の崇敬を集める。また、政府側も宥和的な活仏には大きな信頼を置き、省から国家レベルの官職

に積極的に任命する。そのため、一般の民間人から国家の元首まで自由に接触、交流することが可能で、一定の権力を持つ特別な存在となる。さらに国家上層部から民間まで、自由に動けることで、彼らは政府レベルから民間レベルまで多くの情報を持っており、彼らの行為、発言などは常に注目している必要がある。チベット仏教世界の活仏、あるいはイスラム教世界の宗教指導者について研究することは、地域社会研究にあたって、重要なポイントであると考えられる。

本稿では、主にシャリワン・ゲゲン14世の円寂から、半年以内のホボクサイル・モンゴル社会の動きに関して検討を行った。通常、活仏が円寂されると、3～7年以内に来世が認定される。その認定過程では、政府と宗教界の利害関係が複雑に絡まる。シャリワン・ゲゲン14世後のホボクサイル・モンゴルの動向は、引き続き注目する必要がある。

注

- 1) 世俗的活仏とは、チベット仏教世界にのみ存在する特殊な制度である。当該社会では、人々を救うために、この世の人間の一人として出現した仏の化身を「活仏（転生ラマ）」と呼ぶ。活仏は社会的な制度として確立しており、仏の化身であると同時に、財物の相続権まで認められているように、世俗的な側面がある。また、かつては大きな政治的権力を有していた。
- 2) シャリワン・ゲゲン14世が円寂した時間は現地時間（新疆時間）10月17日の23時である。通常、新疆時間は北京時間より2時間遅れており、もし、ゲゲンの円寂した時間を北京時間にすると、10月18日の1時となる。現在の新疆においては、北京時間を使用している人もいるし、新疆時間を使用している人もいる。そのために、ゲゲンの円寂した時間について、北京時間を使用する人々は10月18日とし、新疆時間を使用する人々は10月17日とするという相違が見られる。筆者は後者の立場に立つ。
- 3) ホボクサイル県城にある仏教寺院である。ホボクサイルの「旧王の旗」の後裔たちの巡礼する寺院である。
- 4) 諷経とは、経典を声を出して読誦すること。

- 5) 唵経とは、経典を高い声で朗誦すること。
- 6) 本稿は『総研大学生派遣事業（調査活動）』の経費による実施された調査成果である。
- 7) 新疆ウイグル自治区クラマ依市領内にある区で、ホボクサイル鎮の西南部に位置し、100Km離れている。中国語では烏爾禾と呼ぶ。ウルフは本来ホボクサイルの領土であり、クラマ依市周辺に油田が発見された後、クラマ依の領域とされた。本来、ウルフにいたホボクサイル・モンゴルの子孫たちは依然としてウルフに生活している。
- 8) ハダグとはモンゴル人が祝賀や尊敬のしるしとして一般の人々や宗教関係者（活仏・僧侶）に捧げる白・黄・青などの帯状の絹布である。
- 9) ホボクサイル県領内にある山脈の1つ、県城のホボクサイル鎮の東南部に位置し、100Km離れている。
- 10) ホボクサイルにおける遊牧地域においては、高いところに登らないと、電波を捉えることができないためである。
- 11) ホボクサイル県国营牧地の政府がある鎮であり、牧場というのは、行政単位で、郷と同じレベルの行政単位の1つ。県城のホボクサイル鎮の東部に位置し、60Km離れている。
- 12) 中国青海省湟中県領内にある寺院で、モンゴル語では、Günbünという。ここはゲルク派の開祖であるツォンカパの生まれた聖地であるため、モンゴル・チベット仏教世界において聖地といわれている（蒲 1993: 141-143）。
- 13) ゲゲン火葬の場所に関して誰が指示したかについては、今回の調査ではわからなかった。だが、シャリワン・ゲゲン13世の霊塔がオワート寺の庭に建てられていて、文化大革命のとき破壊されたことが現地の多くの年配者に知られている。その情報が1つの根拠になったのかもしれない。また、専門の絵に関してどのような絵が描かれたかは明らかにされていない。
- 14) 本来はモンゴルの大ハーンの宮廷を指す用語であった。ホボクサイルでは、シャリワン・ゲゲンの居住するゲルをオールドと呼ぶ。
- 15) 今後のシャリワン・ゲゲン15世の認定にあたっては、政府や宗教界の様々な勢力の利害が関わることがあるため、夫婦二人の実名を出すことは避けた。
- 16) 赤い顔とは、現地のモンゴル語で決まり文句である。面と向かって会うという特別な意味を持っている。
- 17) 清朝時代の四大活仏の一人であり、主に内モ

- ンゴルを中心に影響力があった。
- 18) ホボクサイル県領内にある山の1つ、県城のホボクサイル鎮の西部に位置し、50Km離れている。従来からホボクサイルの心臓と言われ、聖なる山と考えられてきた。ホボクサイル旧14ソムが皆で祭る盟のオワーは、バヤン・オンドルの頂上にある。
 - 19) オボヤオボーという表記は日本語文書で多く使用されているが、本稿ではオイラド方言に従ったオワー (Ovaa) にした。山や峠に土や石を積みあげた構造物。石や土で円錐形に作った基壇の上部に木枝をさし、その中心に三叉矛や槍を立てる。モンゴル人はこれに天神地祇が降りて宿るとし (オワー自体を地祇とみる考えもある)、毎年春から夏にかけて祭を行い、牛馬などの生畜またはその肉、乳製品その他を供え、五畜などの豊饒、息災その他を祈り、オボーのまわりをめぐり、かつ競馬、相撲、弓射を奉納する。
[<https://kotobank.jp/>]
 - 20) このCDは2012年から2014年までのシャリワン・ゲゲン14世の4回の訓話を収録している。本稿はその内、シャリワン・ゲゲン14世の最後の訓話のみを取り上げる。その他の訓話に関してはまた別稿で検討することにする。
 - 21) オトクは旧モンゴル社会における行政単位の1つである。本稿でシャリワン・ゲゲン14世の指す「オトク化思想」とは、本来のオトク制度と似たような血縁関係を基盤とする単位によって内部分裂することを意味している。
 - 22) 17、18世紀新疆、中央アジア、南シベリアを中心に広大な地域を支配したジュンガル帝国のことを指す。本来、ジュンガルとは左翼という意味で、オーロド (Ööld) 部を中心として指導権を握っていた政権であった。
 - 23) ソム (漢文では「佐」の字が当てられる) とは、清朝のモンゴル統治の際、用いた行政制度である。それは旗の下位単位となる。
 - 24) イジル河という用語はモンゴル世界で多く用いられている。日本語文献ではヴォルガ河とされることが一般的で、本稿でもそれに倣ってヴォルガ河を指すとする。
 - 25) イジル河畔における旧トルグド汗国の地名であり、現在のロシア連邦カルムイク共和国ユスティンスキー・ライヨン (Yustinski・rayon) あたりの地域を指す。
 - 26) イジル河畔における旧トルグド汗国の地名であり、現在のロシア連邦カルムイク共和国チェルノゼメルスキー・ライヨン (Chernozemelski・rayon) あたりの地域を指す。
 - 27) タイジインキン (Tajjinkin) とは、ホボクサイルにおける旧ザヤサク旗ゲキレーキン・ソムに含まれてきた一部の人々を指す。
 - 28) ナムダキン (Namdakin) とは、ホボクサイルにおける旧六ソム旗シェベヌル・ソムに含まれてきた一部の人々を指す。
 - 29) トルグド・モンゴル人に仏教を布教した人とされ、歴史上有名である。現在の民間において、ソホル・サンダグに関する様々な伝説が残されている。
 - 30) 新疆ウイグル自治区北東部に位置し、中国語で阿勒泰地区と呼ぶ。居住する住民の中で、カザフが多く、新疆においてカザフが主に集住する地域の1つ。名称の意味については、モンゴル語で「金がある」、「金をもつ」という意味である。
 - 31) 新疆ウイグル自治区北部に位置し、中国語では、塔城地区と呼ぶ。居住する住民の中で、カザフが多く、新疆におけるカザフが主に集住する地域の1つ。名称の意味については、モンゴル語で「タルバガがある」という意味である。
 - 32) 旧モンゴル社会における官職名であり、旧社会体制の最下位単位となるソムの役人。
 - 33) 旧モンゴル社会における官職名であり、旧社会体制の最下位単位となるソムの役人。ザヤングの下にあたる最下位の役人。
 - 34) 中国青海省塔爾寺における土族出身の活仏で、中国語で楊嘉活仏と呼ぶ。今日のヤンジャ・ゲゲンはヤンジャ・ゲゲン3世であり、ホボクサイルの仏教界と、関係が深い活仏の一人である。
 - 35) ダルは尼僧仏のことを指す。ダルの経典とは、尼僧仏の経典を意味する。
 - 36) ホボクサイルの各仏教寺院において、従来から祭ってきた仏教儀礼の1つである。シャリワン・ゲゲンの靈魂に対する祭りで、旧暦の毎月12日に祭っている。
 - 37) シャガー・チムグ (Šavaa čimüg) を持たせる儀礼は次のように解釈されている。すなわち、シャガーとは骨と骨を繋げる重要な部分である。そのため、嫁にそれを持たせるということは、二人が結婚するということが、元々は関係がなかった2家の絆となって、それが永遠に続くことが望まれている。
 - 38) カーテンを開くとは、結婚式がゲルで行われる際、ベットの从上からカーテンを付け、カーテンの中に嫁が坐らせる。そこでカーテンを開く儀礼の際、カーテンを開いて、嫁の顔を皆に見せる。

- 39) モンゴル遊牧民の世界における伝統的飲み物の一種で、乳酸菌と酵母によってウマの生乳を発酵させて作られる飲料である。
- 40) モンゴル遊牧民の世界における伝統的酒の一種である。モンゴルのヨーグルトは一般に牛乳で作っており、ヨーグルトを加熱させて作る蒸留酒を牛乳酒と言う。
- 41) ホボクサイルを代表する酒であるといわれる。工場は塔城市にある。
- 42) 一般的な新疆在住漢族の特徴に、トルコ系民族からの文化的影響の顕著な証拠を見いだすのは難しい。ただし、個人的見聞に基づく印象というレベルにしか過ぎないが、漢族を含む新疆在住諸民族には、生活文化面の一部に、ある種の複合現象が見られるように思われる。とくに、必ずしも漢族にとって自覚的な選択ではないものの、食文化の嗜好が明らかにウイグル人の食文化からの影響を受けている。すなわち、ウイグル人などとの共存というマルチ・エスニックな環境の下で、漢族の間にも「外食」においてラグマン（麺の一種）やポロ（羊肉と人参などの炊き込み御飯、漢語では「抓飯」）など、ウイグル人の「民族料理」が浸透している（新免2003: 490）。
- 43) 1630年代末から1720年代中期までに今日の中国青海省辺りで建てられたホシユド部の政権である。
- 44) ジュンガル人60万人が清朝によって虐殺されたことは、民間においていわれてきたが、それを実証することはできない。
- 45) 2013年7月に新疆ウイグル自治区仏教協会副会長、シャリワン・ゲゲン14世の秘書であるŠ氏に対して行われたインタビューの記録を根拠とした。
- 46) グンブン・ゲゲン9世（Günbün gegen）は新疆のオイラド・モンゴル世界におけるもう一人の高い地位を持つ活仏である。グンブン・ゲゲン9世は新疆ウイグル自治区烏蘇市出身で、バヤンゴル・モンゴル自治州の最大のチベット仏教寺院であるバルガンタイのシャル・スム（黄寺）において活躍していた。
- 47) 1987年に当時新疆ウイグル自治区仏教協会会長であったグンブン・ゲゲン9世が北京で全国政治協商会会議に参加したときに病気で円寂された。その後、1988年にシャリワン・ゲゲン14世が仏教協会会長となった。
- 48) カササギは実際には白黒の二色でしかない。しかし、白でもなく、黒でもない。モンゴル世

界の考えでは、どちらか一方に偏らず、複数の要因や力の中でバランスをとるということを重視する。一般に万物が長く成り立っているのはバランスをうまく調整できているからであるという。ジャリワン・ゲゲン14世もこうしたモンゴル世界の本来の原則をもって、複雑な新疆社会において、活躍してきたといえる。

- 49) 「チンギズ・ハンの大ヤサ」の第33条では、飲酒について「もし酒を廢すること能はずんば、一ヶ月に三度飲むべく、三度を越ゆるときはこれを罰す。もし一ヶ月に二度飲むならばなほよく、一度ならばさらに讀むべし。全く酒を攝らざるものあらば、さらに良からん。されど、何處にかかる人ぞあるべき。もしあらば、このものはあらゆる賞讃に値すべきものなり」と書かれている（青木1943: 102-106）。
- 50) 山口（1988）によると、活仏の転生制度は14世紀チベット仏教のカルマカギユ派によって確立された伝統であるという（山口1988: 131-132）。
- 51) ダライ・ラマの政教政権は1642年に四オイラド連合ホシユド部グーシ・ハーンの協力によって成立してから1959年に亡命するまで維持された。

参考文献

日本語文献

- 青木富太郎譯・リヤザノフスキー
1943 『蒙古法の基本原理』生活社刊。
- 小林弘二
1997 『二十世紀の農民革命と共産主義運動』勁草書房。
- 新免 康
2003 「中華人民共和国期における新疆への漢族の移住とウイグル人の文化」塚田誠之編『民族の移動と文化の移動』pp. 479-533、風響社。
- 田中 周
2010 「新疆ウイグル自治区における国家統治と民族区域自治政策」『早稲田政治公法研究』94: 63-76。
- ナムジャウ
2015 「活仏の世俗的訓話とその役割」『総研大文化科学研究』11: 97-117。
- 仁欽
2011 「中国少数民族地域における社会主義的集団化政策」『富士ゼロック株式会社

小林節太郎記念基金2008年度研究助成論文』。

山口瑞鳳

1988 『チベット（下）』東京大学出版社。

1977 「『活仏』について」『玉城康四郎博士還暦記念論集・仏の研究』 pp. 285-301、春秋社。

中国語文献

蒲文成

1993 『甘青蔵伝佛教寺院』青海人民出版社。

蒲文成訳・章嘉・若貝多杰

2006 『七世達頼喇嘛傳』中国蔵学出版社。

中国蔵学研究中心・中国第二歴史档案馆 合編

1990 『九世班禪円寂致祭と十世班禪轉世坐床档案選編』中国蔵学出版社。

1990 『十三世達頼円寂致祭と十四世達頼轉世档案選編』中国蔵学出版社。

モンゴル語文献

サランゲレル

2011 『モンゴル民俗文化探源』民族出版社。

The Effects of Tulku on Oirat-Mongolia Society in Xinjiang

A Case Study after the Death of Shariwan Gegen XIV

Namujiafu

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),
School of Cultural and Social Studies,
Department of Regional Studies

This paper examines the influence of the secular Tulku of Xinjiang Oirat-Mongolia who reached nirvana in last October, Shariwan Gegen XIV, by analyzing author's field data regarding mourning ceremonies and prayers for his reincarnation performed by the people of Hoboksair-Mongolia, his birthplace.

Shariwan Gegen XIV not only commended the reverence of his followers, but he was also appointed one of leaders of Mongolian Buddhism by the Chinese Government. His standing enabled him to successfully communicate with both higher level bureaucrats in the government and the local community. He became a source of information, his words and activities being considered reliable. Thus he had considerable influence on both the government and the people. For the past several decades, Shariwan Gegen XIV was not only a religious leader but also played the role of a political leader of the people of Oirat-Mongolia in Xinjiang.

The ceremonies and prayers offered for the reincarnation of Shariwan Gegen XIV represent, in some degree, the nationalism of the Oirat-Mongolian people that has grown up during the 30 years under Shariwan Gegen's leadership. However, compared with the nationalist movements of certain Muslim peoples in Xinjiang, that of the Oirat-Mongolians has been mild and sentimental, and has avoided violence and bloodshed.

Key words: Oirat-Mongolia, Tulku, Shariwan Gegen